ぬらんに、少も早く返しあたへられよかしと云ければ、夫も聞もあへず、足をせいにして走り行しが、二三里も過て、谷川のさかしき邊に、法師の觀念してをるありければ、さてとぞと思ひ、聲をはかりに呼かけて、漸に往つき、御坊は何とて左樣の體にやと問ければ、官金を路次にて落し、此上は生涯の榮絶ぬれば、ながらへてもかひなく存じ、身をなげんと存より、念誦いたし候なりといひけるに、されば、こそ、かくあらんとおもひしなり、御立ありし跡にて、妻の見付出候まゝ、少しもはやく屆け申度、息を限りに走り附たりとて、取出しあたへければ、兎角の答も得せず、涙にむせび、存も寄らず、御なさけ生々世々えこそ忘れ申まじと、禮拜して往わかれける、終に音信もなかりける、數年の後紀州の役人、高野に使して巡見しけるに、長六七尺石碑に、彼足輕の名を彫付て、彼座頭勾當撿校になりて、其足輕の祈禱の爲に建たるよしを書たり、不思議の事に思ひて、國に歸り、人にかたりしが、いつとなく上へも聞へて、彼者を呼出し尋られしに、しかのよしを申ければ、至て正直なるものなりとて、士に取立られしとぞ、

〔倭訓栞中編八古〕ごせ　瞽女の轉訛せるにや、或說に、御前也、常盤御前、靜御前の稱に比せり、瞽者を座頭といひ、瞽女を御前といふは、美號をもて憐む也といへり、

〔和漢三才圖會十人倫之用〕瞽目　盲女、俗云五是、　瞽女之字訛呼也

按盲女卽瞽女也、鼓箏三絃、歌曲以爲女子之姆、或列于酒宴、凡以箏之三曲傳授爲規摸、

〔今昔物語十二〕藥師佛從身出藥與盲女語第十九

今昔、奈良ノ京ニ越田ノ池ト云フ池有リ、其ノ池ノ南ニ蓼原堂ト云フ里有リ、其ノ里ノ中ニ堂有リ、膠原堂ト云フ、其ノ堂ニ藥師佛ノ木像在マス、阿倍ノ天皇○元明ノ御世ニ、其ノ村ニ一人ノ女有リ、二ノ目共ニ盲タリ、而ルニ此ノ盲女一人ノ女子ヲ生メリ、其ノ女子漸ク勢長ジテ、歲七歲ニ成ヌ、母ノ盲女寡ニシテ夫无シ、極テ貧キ事无限シ、或ル時ニハ食物无クシテ食ヲ求ルニ難得シ、我

女盲